

// 卷 頭 言 //

社会福祉法人日本ライトハウス
視覚障害リハビリテーションセンター副所長 嶋田 彰

忘れてはならない光景

令和5年も終わろうとしている。毎年のことではあるが、この12月になるとやり残した諸々が脳裏を駆け巡る。時間は容赦なく過ぎ去る。あらためて、その瞬間をその日を大切にしなければと思う。

これは私が寄稿した日本ライトハウス社内報『時報（11月号）』だ。少しでも多くの方々にこのような光景があったことを紹介しておきたい。常日頃、なにげに仕事をともにしてきた諸先輩たちの行動に、生意気な若造であった私は感銘を受け「これが僕たちの継承すべき仕事、役割だ」と使命を感じた瞬間であった。



9年前の平成26年春、私は日本ライトハウスの門を叩いた。正面玄関を入った法人本部前には懐かしい紫色と青色のポスターが張られてあった。そのポスターに映るヘレンケラーさんは、不安と緊張の面持ちでいる私を優しい笑顔で迎え入れてくれた。

平成17年の9月、通常であれば「是非見てくれ」と言わんばかりに創意工夫を凝らしたデザインの吊り広告が、少し開いた車窓から入り込む風やガタンゴトンと揺れる車内でゆらゆらとしているのだが、その時だけは違った。いつもながら混雑した御堂筋線の車内には、その紫色と青色に統一された横長のポスターが整然と並び揺れていた。スーツ姿の白髪の中年男性は眼鏡を少し傾けそのポスターを見ている。ベビーカーに乗った子どもがお母さんとそのポスターを一緒に指さしている。そして学生であろう若者たちは流行りの話題で盛り上がってはいるが、その統一されたポスターが気になるのだろう、ちらちらと眺めている・・・

そのポスターにはヘレンケラーさんの横顔とともに、『あなたのランプの灯火をいま少し高く掲げてください。障害がある人の行く手を照らすために』

と記されている。

これは、私が以前から関わる大阪障害者雇用支援ネットワークが、障害者雇用支援月間である9月に『地下鉄美術館』として大阪市営地下鉄御堂筋線の一両編成を貸し切り、支援学校の学生さんの描いた絵画と共に展示した取り組みである。当時、私はひとりでも多くの障がいのある方々が企業就労できる社会を目指し現場で奮闘していた時期であったが、あの光景は今でも忘れることができず熱い思いがよみがえる。そして最後は『<心身機能の変調=障害>は、さまざまなく生きにくさ>を誘発します。その解消は、本人の努力や家族の責任によってではなく、社会全体で取り組む必要があります。あなたのご理解が共感・共振・共生の輪として拡がり、あなたの隣で障害がある人が堂々と働いています。そんな姿が当たり前になりますようお願いしています』と締めくくられている。

私たち日本ライトハウスは100年の歴史を迎え、すでに新たな歴史を刻みはじめている。これからも障がいのある方々にとっても、それを支える社会にとっても意味のある存在でなければならない。そのためには自発的な社会福祉の創造を止めてはならず、常にメッセージの表明（覚悟）と事業の展開（行動）ができる集団でなければならない。

今日も私はそんなことを願いながら、法人本部前の紫色と青色のポスターに映るヘレンケラーさんを仰いでいる。まずは私自身があの忘れてはならない光景と熱い思いを失わないように。



今年やり残した諸々とともに辰年の令和6年を迎える。あらためて当法人の基本理念を念頭に置きながら龍のように上昇気流で駆け上っていきたい。

【日本ライトハウスの基本理念】

1. 社会の公器であることを自覚し、公正・健全・透明な事業活動を推進する
2. 信頼され、信任を得るサービスの充実をはかる
3. 誠実で包容力のある温かいサービスの提供に努める
4. 時代や環境の変化に応じた組織づくりに努める